

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット 2025年度 シンポジウム
外国人児童生徒等教育を担う教育者・支援者の育成 - 『多様性の包摂』の実現に向けて -
2026年1月31日 13:00-17:00

視線合わせから、意識合わせ、呼吸合わせへ —OECD Teaching Compassで考える教育者コミュニティのこれから—

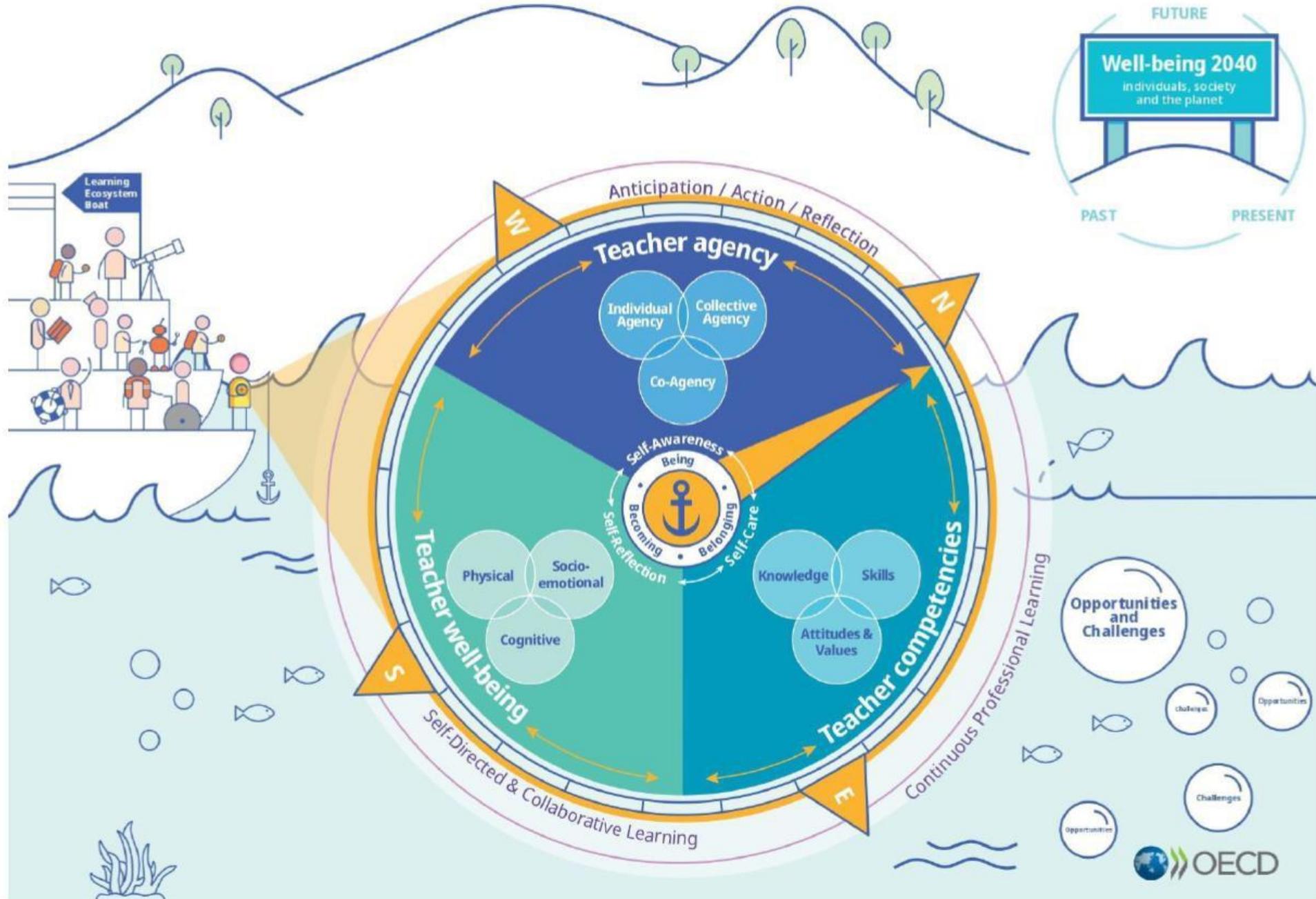
東京学芸大学
西村 圭 一

本資料の利用について

教育・研修を目的とした利用に限ります。資料としてご利用を希望する場合は、コンテンツの出典として「利用する資料等の作成者・執筆者」「利用する資料等が作成・公開された事業名」「コンテンツが示されているウェブサイトのURL」を明記して利用してください。部分的な切り取りや加工をして利用することは禁じます。

OECD ティーチング・コンパス (教師の羅針盤)

©K.Nishimura



日本語訳

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（イメージ）

主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる

対話的な学び

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める

深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう

主体的・対話的で深い学び

学習指導要領 総則 第3 教育課程の実施と学習評価

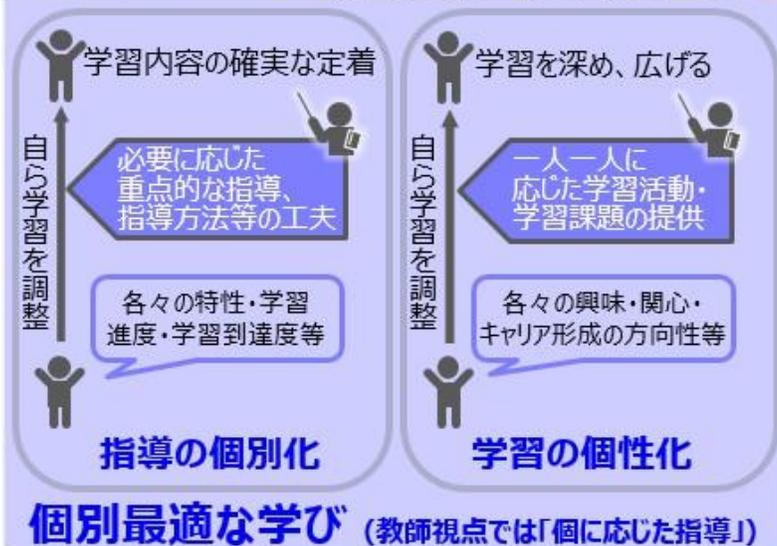
学習指導要領 総則 第4 児童(生徒)の発達の支援

授業改善

一体的に
充実

授業外の
学習の改善

資質・能力の育成



個別最適な学び（教師視点では「個に応じた指導」）

修得主義 ・個々人の学習状況に応じて学習内容を提供 ・一定の期間における個々人の学習の状況・成果を重視
の考え方を生かす

異なる考え方が組み合わせり
よりよい学びを生み出す



協働的な学び

クラスメイト



異学年・他校の子供



地域の人



専門家



等

これからの学校には……一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。



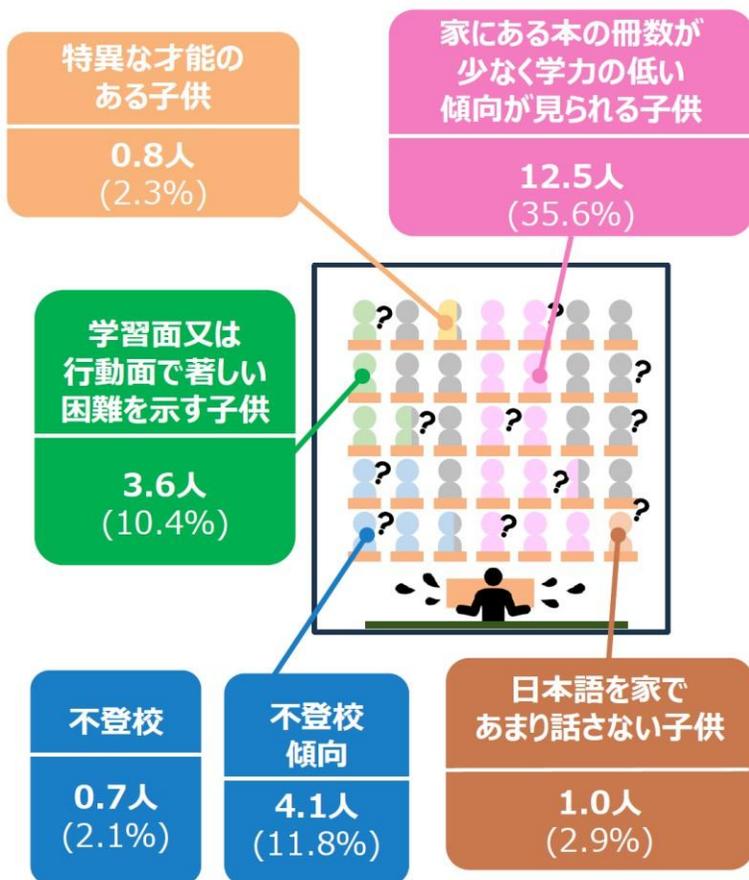
平成29,30年改訂
学習指導要領 前文

教室のリアリティー

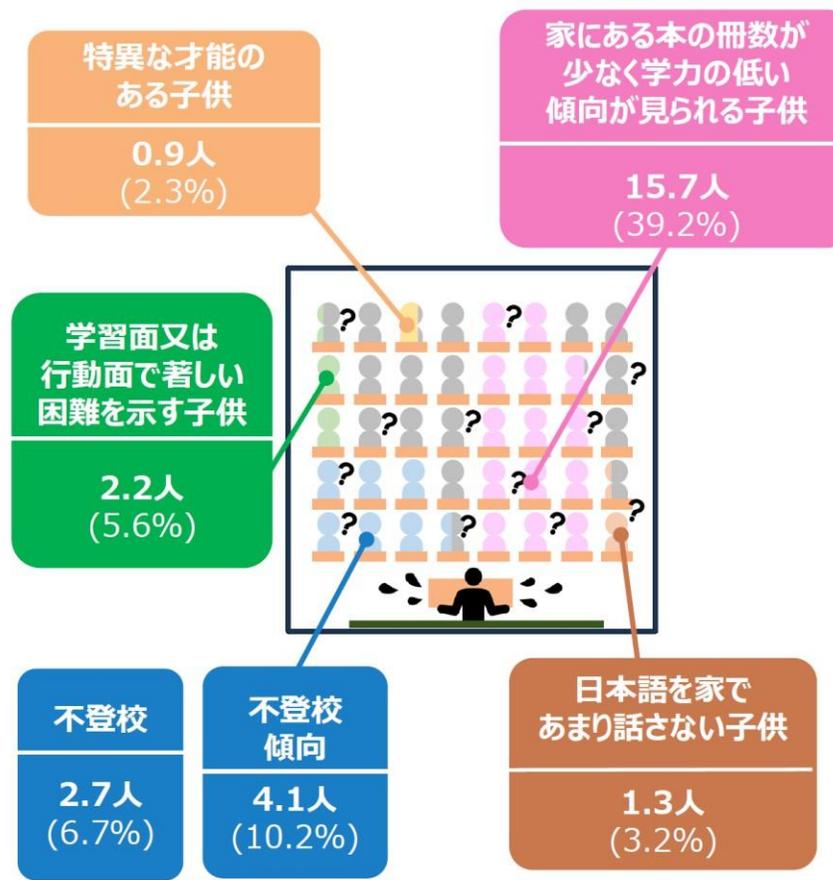
児童生徒の多様性を包摂する必要性（小・中）

- どの学校でも、多様な個性や特性を有する子供が在籍している実態が顕在化。多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現が喫緊の課題

小学校（35人学級）



中学校（40人学級）



※各数字の出典は諮問参考資料P45,46参照

https://www.mext.go.jp/content/20242127-mxt_kyoiku01-000039494_03.pdf

【現行制度の状況】

これまでの取組

- 在籍校での学校生活や教科学習に必要な日本語の「取り出し」指導等を行うため、平成26年に個別の児童生徒に着目した特別の教育課程を制度化した（着実に活用が進み、令和5年度で小中約6千校、約4.4万人に実施）

生じている課題

- 現在の日本語指導は、漢字や文法等の初期指導に留まることも多く、日本語と教科の統合学習により資質・能力を効果的に育成する取組は道半ばである
- 特に、児童生徒の実態によっては、意味理解や概念の獲得において母語の力を効果的に活用した指導も重要だが、その在り方が明確化されていない
- 現行の特別の教育課程の規定は、日本語指導に重点が置かれ、資質・能力の育成が目的であることや母語の力を活用した指導が可能であることが明確でない

「日本語に通じない児童のうち、当該児童の日本語を理解し、使用する能力に応じた特別の指導」
- 母語の力を引き出す上での生成AI等のデジタル技術の活用（学校では多様な言語に対応が困難）や、教科学習で鍵となる学習語彙の習得を含め、指導方法等の知見が不足している



【方向性と具体的論点】

表面的な日本語指導を脱却する「資質・能力の育成のための新たな日本語指導」（仮称）を再定義し、特別の教育課程に位置付け、質の向上を図る方向で検討すべき

- ① 日本語と母語の力を活用した『知識及び技能』と『思考力、判断力、表現力等』の一体的な育成が特別の教育課程の目的であることを明確化するため、学校教育法施行規則等の規定を改正する方向で検討すべき
- ② 「資質・能力の育成のための新たな日本語指導」（仮称）を体系的・専門的に実施できるよう、考え方や指導内容・方法等を含め国が全体像を示す方向で検討すべき
- ③ 加えて、
(1) 学校では対応困難な母語の力を引き出すことを含め、会話・翻訳・読み上げ・ルビ振り等での生成AI等のデジタル技術の活用、
(2) 日本語指導が必要のない児童生徒への応用も含めた、教科学習での学習語彙の活用、
について、具体的推進方策を検討すべき

- 「多様な社会」を謳いつつも、じつはこれまで以上に一様な社会になっているとつくづく思う。
- じぶん（たち）と同じタイプか、そうでないかと、それと気づくことなく腑分けしている。じぶん（たち）とは違う、別の生き方を選び（あるいは、強いられ）、別の価値観をもち、世の中を別なふうに感受している人たちと交わることで、じぶんにはこれまで未知のものだった生き方や価値観、感覚様式に身を開いてゆくことが、多様な社会を生きることの意味であるはずなのに、実際には大勢（たいせい）は、それらと交わることなく、逆にたがいに干渉しあわない、そういう棲み分けに向かっているようにみえる。

・・・以前から東京に「格差」があることは実感として知られていた。（中略）身もふたもなく露出され、ビジネスや消費の対象となることは、現在ほど一般的ではなかったと考えられる。

こうした事態の背景には、「格差」についての過去の常識が通用しなくなっているという点、とくに**三層化**の問題が関係していると考えられる。・・・これに対して**ランキング**を実際に気にするのは、居住条件に相応の配慮をする余裕はあるものの、しかし現実には最上層のようにはいかない中間層の人びとであると想像される。・・・拡大してしまった差異に対応できないがゆえに、**小さな差異に対してはむしろ敏感にならざるをえない**。このため、あまり根拠がないとわかっているにもかかわらず、ランキングや**SNS**上の評判に右往左往せざるをえない状況が生まれている。メディアの側もそこに正気を見つけ出し、格差を煽る結果を招いている。



都市に聴け

町村敬志

もう一度、
街へ出てみよう

有斐閣

そこでは何が起きているだろうか

主体的・対話的で
① **深い学び**
(Excellence)

主に第2,3,4,6章
(生きて働く「確かな知識」の
化・深化、「好き」を育み「得
の抜本的向上、個別最適な



No action

② **多様性の包摂**
(Equity)

、裁量的な時間、個別の児童生徒に係る
デジタル学習基盤を活用した学習環境デザ
び・協働的な学び等)

学び
「裁量的



Inclusion

る基盤整備
境整備

生涯にわたって主体的に学び続け、多様な他者と協働しながら、
自らの人生を舵取りすることができる 民主的で持続可能な社会の創り手 をみんなで育む

あれもこれも自力ででき、立つことのできる個人の育成を目指す「人材開発」ではなく、凸凹ある者同士をいかに組み合わせるかを考え、試行錯誤しつづける「組織開発」という角度からだ。

勅使川原真衣（2025）．格差の“格”ってなんですか？ 無自覚な能力主義と特権性．朝日新聞出版

OECDのTeaching Compassにおける Being, Belonging, Becoming



Being—教育者としてどうあるか（存在・自己認識）

単に知識を教える存在ではなく、どのような価値観・信念・感情を持ち、教育に向き合うかという「存在のあり方」、教育者としてのアイデンティティを指す。

Belonging—誰とどうつながっているか（所属感・関係性）

学校・地域・専門職コミュニティとの関係性や、他者との協働を通じた帰属意識の確立を指す。
他者とつながることが、心理的安全性や自己効力感、指導主事の成長と実践の持続可能性を高める。

Becoming—どうなっていくか（自己認識の変容・成長）

継続的に学び、生涯を通じて専門性を深め、社会や教育の変化に対応し続けていくことを指す。

教育集団づくり・コミュニティづくり

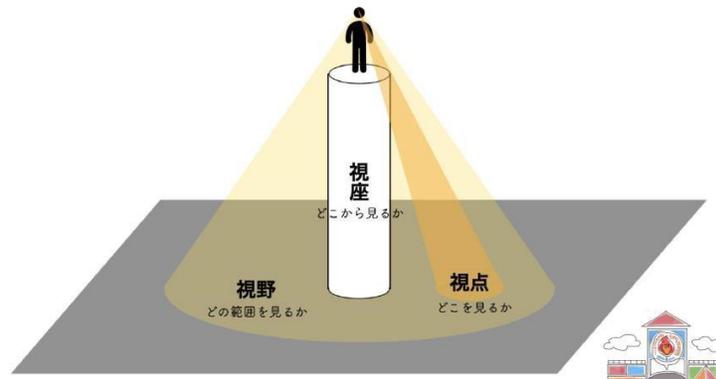
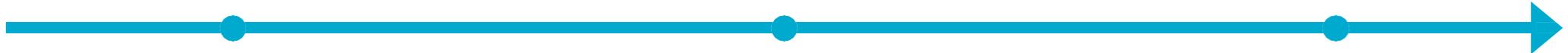
何をめざすか

どうめざすか

視線合わせ

意識合わせ

呼吸合わせ



子どもの学びの
実相への着眼



壁のないあそび場-bA-

日本OECD共同研究

■学校内のつながりの中で

「教員」と「生徒」の壁
「遊び」と「学び」の壁
「探究学習」と「教科学習」の壁
「教室」と「学級」の壁
など

■学校の制度を超えた中で

「校種」の壁
「幼少小中高大の連続性」の壁
「学校と企業」の壁
「教育と福祉」の壁
など

■制度を超えた

「暮らし・空間のつながり」の中で
「学校」と「地域」
「都市部」と「地方」
「国内」と「国際」
「日常」と「非日常」
など





探究的な学びの実践コミュニティ
拡大支援プログラム
オンラインセミナー

探究のアップデート 「探究2.0」を 共創しよう

2026

3 / 7 土

15:30
~17:30

「多様性」がキーワードとなる現代社会において、私たちは改めて
“他者とともに学ぶ意味”を問い直す時期を迎えています。

高校探究プロジェクトでは、対話を起点に他者にかかれた探究へと
転換する新たなアプローチを「探究2.0」と位置づけ、その実践コミ
ュニティを全国の高校生や先生方とともに拡げていきたいと考え、本
セミナーを開催します。

PROGRAM:



15:30 第1部・オープニング

開会の挨拶

東京学芸大学先端教育人材育成推進機構長
佐々木 幸寿

基調講演

「OECDティーチング・コンパスをTALISデー
タから紐解く」

OECD教育スキル局 シニア政策アナリスト
田熊 美保氏



16:20 第2部・パネルディスカッション

テーマ:「探究2.0」実践コミュニティづくり

パネリスト:

三菱みらい育成財団 常務理事

妹背 正雄 氏

OECD教育スキル局 シニア政策アナリスト

田熊 美保 氏

東京学芸大学高校探究プロジェクト

サブリーダー 日高 智彦

モデレーター:

高校探究プロジェクト・リーダー

西村 圭一

17:10 ブレイクアウトセッション

17:30 クロージング



APPLICATION ▶

Webフォームより
お申込みください
申込締切: 3月4日(水)
※お申込みいただいた方には、開
催数日前に詳細をご連絡します。

